

第1章 理念・目的

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画		根拠資料 Alt+Enterで簡条書きに	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述		(中長期的対応) H列にあれば記述
(1) 付属機関等の理念・目的は適切に設定されているか							
a ◎高等教育機関として大学が追及すべき目的(建学の精神、教育理念、使命)を踏まえて、当該付属機関・委員会の理念・目的を設定していること。 【約500字】	農場の目的については、明治大学農場規程(2011年4月20日制定)に「農場は、農場に関する実習その他の学生教育を行い、農場を活用した研究の推進を図るとともに、その成果を社会に還元することを目的とする。」と定められている【1-36-1:第3条】 この目的の達成のために、継続した栽培教育のできる環境の確保は長年の悲願であった。2012年4月に開所した黒川農場は、既存農場(富士吉田、菅田)の機能統合、拡充により、学生が継続した栽培教育を受けることができるとともに、環境と共生しつつ大学農場としての高度な先端技術を駆使した生産・効率性の高い栽培システムと持続可能な資源循環型のシステムを併せ持つ農場を目指すものである。この目的達成のため、新農場の基本コンセプトとして、環境共生、自然共生、地域共生の三つの共生を柱と定めた【1-36-2:378頁】 環境共生については、景観的にも環境と調和した木材建築を随所に配し、農場内里山林保全整備で排出される木質バイオマスは、ペレット化して温室暖房の一部に利用するなど、再生可能なエネルギーの農場内循環利用を実現させるとともに、太陽光、風力及び雨水の有効活用などによる資源循環型の農場を目指す。 自然共生については、地域と連携した里山管理を行いながら周囲の里山を利用した研究・教育を実践するとともに、自然生態園(ピオトープ)を環境教育の場として開放する。恵まれた周囲の自然環境を活用した自然共生型の農場を目指す。 地域共生については、リバティアカデミーと連携した市民農園型農業講座「アグリサイエンスアカデミー」の充実など市民への学習の場の提供、川崎市等の事業連携協力の推進、小中高生の視察の受け入れや環境教育の場の提供など、社会に開かれた農場を目指す。 農場の理念については、「教育・研究に関する長期・中期計画書」において、「環境と共生しつつ大学農場としての高度な先端技術を駆使した生産・効率性の高い栽培システムと資源循環型の持続可能な環境保全型のシステムを併せ持つ農場を目指す」と明記している【1-36-2:378頁】。	農場の目的を遂行するための圃場及び施設が黒川農場開所時の2012年度に整備され、2014年5月現在、農学部所属の専任教員2名と農場所属の専任教員4名、客員教員1名が在籍し、施設と人材が整備された。 リバティアカデミーと連携した市民農園型農業講座「アグリサイエンスアカデミー」も拡充・充実し、2012年度は1講座45名の受講者数が2013年度には2講座に拡充され91名に増加し、参加者からは高い評価を得ている【1-36-3:7頁】	里山環境の保全、果樹園の整備や継続した圃場・施設の整備を行う必要がある、そのための人材(校務職員)や予算の確保が必要である。 調理実習室が設置されたが、食品加工実習や社会人教育の場として活用するためには、設備の充実と食品加工実務の出来る人材(校務職員)の確保が必要である。さらに、農場運営の円滑化のために専任の事務職員も配備が必要である。	2015年度に1名、2016年度に2名の専任教員の任期が満了となるため、農場の理念・目的に合致した教員の任用を継続的に行う。 里山保全や食品加工等、新たなニーズに対応した市民講座を拡充、充実させる。	里山環境の保全、果樹園の整備のための人材(校務職員)及び予算の確保に取り組む。 年度計画書により、専任事務職員の配置に取り組む。	里山環境を保全するための人材と予算の確保を継続して行う。また、果樹園が数年後には成園化するため、果樹の栽培指導のできる校務職員を確保する。 食品加工施設を社会人教育や地域開放に活用するため、必要な人材の確保に取り組む。	1-36-1 明治大学農場規程 1-36-2 2014年度 教育・研究に関する年度計画書 1-36-3 明治大学黒川農場農場報告第1号(2012年度2013年度合併号)
(2) 付属機関等の理念・目的が、教職員及び学生に周知され社会に公表しているか							
a ◎公的な刊行物、ホームページ等によって、教職員・学生、受験生を含む社会一般に対して、当該大学・学部・研究科の理念・目的を周知・公表していること 【約150字】	農場の目的は、明治大学ホームページ(資料1-36-4)で公開されており、広く社会に周知している。また、建設コンセプトについては農場パンフレット(資料1-36-5)やホームページ(資料1-36-4)に掲載しており、社会一般に公表している。さらに、2014年5月には黒川農場報告第1号(資料1-35-3)を発行し、関係機関に配布した。	農場の内容を「農場報告」としてまとめ、発刊した。 マスコミの取材では、2013年度はテレビ・ラジオ出演2件、新聞掲載19件と多数取り上げられた。 また、視察・見学者も多く、2013年度は98件、延べ1495人であった【1-36-3:35頁】		農場報告を定期的に発行する。 開所年度の2012年度より取材件数・視察者数とも減少しているが、依然として高水準である。今後ともこの水準を維持するため、ホームページ等により広報の充実を図っていく。		1-36-4 農場ホームページ「新農場のコンセプト」 (http://www.meiji.ac.jp/agri/kurokawa/about/index.html) 1-36-5 農場パンフレット	
(3) 付属機関等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか							
a ●理念・目的の適切性を検証するに当たり、責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。 【約300字】	「教育・研究に関する長期・中期計画書」の作成時に農場運営委員会において検証する他、毎週月曜日に開催される「農場内業務連絡会議」において定期的に検証している。						
(I-2) 理念・目的に基づいた特色ある取り組み							
	一般的露地栽培だけでなく、先端的施設栽培施設、循環を重視した有機農業圃場を設置し、多様な実績をもった特任及び客員教員を配備することにより、多様な学生の需要に応えることができ、学生の個性化に対応ができる施設・環境が整備された。 また、社会人教育を軸に、社会連携や川崎市等との地域連携に取り組み、組織としての個性化も図られている。	11月に開催した収穫祭には989人の来場者があった【1-36-3:18~19頁】。 さらに2013年3月結ばれた川崎市と連携協定により、神奈川県との都市農業振興連絡会が開催されるなど地域との連携が強化された【1-36-6】。		収穫祭は多くの来場者が見込まれるため、今後とも収穫体験やガイドツアー等のプログラムを充実させる。 川崎市との連携協定に関しては、市民対象の成果報告会を開催する。		1-36-6 「明治大学と川崎市との生ごみリサイクルに係わる連携事業に関する覚書」	

第2章 教育研究組織

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画		根拠資料 Alt+Enterで箇条書きに	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述		
(1) 付属機関等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか							
a ①教育研究組織の設置状況は理念・目的に照らし、適切であるか。学術の進展や社会の要請と教育との適合性について配慮したものであるか。 ●教育研究組織は、当該大学の理念・目的を実現するためにふさわしいものであるか。 【約300字】	○農場【参照：基準8】 2012年4月に富士吉田及び菅田に保有していた農場を機能統合・拡充した「黒川農場」を開所した。本農場は、教育・研究圃場面積として露地圃場約14,000㎡（うち有機栽培圃3,000㎡）、大型温室3棟（約936㎡×1、約624㎡×2）、中型温室1棟（約288㎡）、小型温室3棟（約162㎡×3）、里山64,000㎡を有し【2-36-1：2頁】、基本コンセプトとして、環境共生、自然共生、地域共生の三つの共生を柱と定めている【2-36-2：378頁】。本農場には4名の特任教員と1名の客員教員が所属し、教育・研究と諸施設の運営を行っている。川崎市と連携協定締結やリバティアカデミー講座の開講など、地元根付いた農場として『地（知）の交流の拠点』へと展開している。	2014年4月から農場所属の特任教員が4名となり、特徴ある教育研究を行う最低限の組織が編制された。農場運営のために「農場運営委員会」及び「黒川農場運営WG（分科会）」が設置され、適切な農場運営を行うための組織体制ができた【2-36-3】。	里山整備計画に基づいた里山の整備・管理のための組織体制の確立が必要である。 食品加工教育に対する環境整備計画の取り組みが必要である。	「農場運営委員会」の定期開催による重要事項の審議とともに、「黒川農場運営WG（分科会）」を実態に応じ改組しながら、適切な運営を推進する。	農場における多様な教育が可能となるように里山及び食品加工教育の充実が必要である。そのための専任教務職員の増強などを年度計画書【2-36-2：380頁】などにより改善を図る。	里山環境の整備、食品加工実習室の地域開放、展示温室等、一般に公開するための施設整備を充実させる必要があるため、教員及び校務職員の適正配備について年度計画書【2-36-2：380頁】などにより改善を図る。	2-36-1 明治大学黒川農場農場報告第1号（2012年度2013年度合併号） 2-36-2 2014年度 教育・研究に関する年度計画書 2-36-3 農場運営委員会議事録（2012年3月5日開催、審議事項2「WGの設置について」）
(2) 付属機関等の教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか							
a ●教育研究組織の適切性を検証するにあたり、責任主体、組織、権限、手続きを明確にしているか。 ●その検証プロセスを適切に機能させて、改善に結びつけているか。 【約500字】	分科会において決定された運営事項について、農場運営委員会で定期的に検証し、承認をすることにより責任体制を整備している。また、農場運営委員会メンバーが、農場内業務連絡会議で農場職員に報告・検討することで、調整機能も果たしている。	農場内では毎週開催される農場内業務連絡会議において十分な検討が行われている。	分科会活動が不十分な部門もあり、その対応が必要である。	農場内業務連絡会を毎週月曜日に継続して実施してゆく。	分科会活動を定期実施する。	時代や実態に応じた分科会の見直しを行う。	

第3章 教員・教員組織

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画		根拠資料 Alt+Enterで簡条書きに
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述	
(1) 付属機関として求める教員像および教員組織の編制方針を明確に定めているか						
a ●<教員像と教員組織の編制方針> 専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等、大学として求められる教員像を明らかにしたうえで、当該付属機関の理念・目的を実現するために、教員組織の編制方針を定めているか。また、その方針を教職員で共有しているか。 【約400字】	(1) センター、委員会等の求める教員像及び教員組織の編成方針 明治大学教員任用規程、明治大学特任及び客員教員任用基準に基づき、農場の事業目的に沿った活動に従事し、研究活動の高度化を推進する教員組織を編成して【3-36-1：380頁】。 (2) 教員組織の編成方針 施設園芸、露地栽培、環境保全等分野において高い専門性を有し、農場実習指導の可能な教員組織を編成している。 ①教員に求める能力・資質等の明確化 実習教育は、これまで実施されてきた土地利用型の露地畑作物だけでなく、園芸作物、加えて植物工場的な高度な園芸生産技術から環境保全型農業生産技術、さらには里山実習等における生物生態学を含むことから、実習担当教員には、幅広い専門性と研究能力が要求される。そのため、採用にあたっては、豊富な研究実績とともに、農作業の実務能力を採用の基本基準【3-36-4】とし、「農場における教員の任用に関する内規」【3-36-2】に基づいて決定する。 また、「学部長会における教員の任用及び昇格審査基準」に任用及び昇格に関して必要な学術論文又は学術著書の編数及び審査基準を定めており、教員に求める能力等を明確化している【3-36-3】 ②教員構成の明確化 大学が毎年度定める「学長方針」や「教員任用の基本計画」に示された教員像に基づき、農場では、「教育・研究に関する長期・中期計画書」に教育及び管理に関する適正規模に基づく教員配置の方針を示している。 2014年教育・研究年度計画書【3-36-1：380頁】では、農場に配置すべき教職員の適正規模については、専任教員2名、特任教員5名、専任教務職員6名、特別嘱託職員5名、さらに専任事務職員1名と嘱託職員1名であると記載しており、年次事業の拡大とともに、適正規模の人員配置にすべきと考えている。					3-36-1 2014年度 教育・研究に関する年度計画書 3-36-2 農場における教員の任用に関する内規 3-36-3 学部長会における教員の任用及び昇格審査基準 3-36-4 明治大学農学部 農場教員募集要項
b ◎<組織的な連携体制と責任の所在> 組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていること。 【約300字】	農場長と副農場長を設置し、組織運営の責任体制を明確にしている。 特任教員4名各々の役割は、有機栽培、土壌管理、施設栽培、社会連携・国際連携と分担されており、客員教員1名の役割は里山管理である。	農場の理念・目的を実現するために、特任・客員教員の役割分担が有効に機能している。		特任・客員教員の任期が満了となる際、農場の理念・目的に合致した役割を担える後任教員の任用を継続的に行う。		
(2) 付属機関等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか						
教員の編制方針に沿った教員組織の整備						
a ◎方針と教員組織の編制実態は整合性がとれているか。 【600～800字】	①編制方針に沿った教員組織の整備 黒川農場の目的・目標に沿って、2012年4月に農学部所属の農場担当専任講師1名と農場所属の特任教授2名を任用し、2013年4月に農場所属の客員教授1名を任用した。 さらに2014年4月には農学部所属の特任教員2名のうち、1名の任用更新の際に農場へ所属変更し、もう1名の特任教員を農学部から農場へ移籍したことで、農場所属の特任教員が4名となった。	2014年度からは、専任教員2名、特任教員4名、客員教員1名の体制が確立し、これらの教員が協力して農場実習が円滑に実施できた。 実習計画と実習終了後の報告書を農学部の各科長に提出するなど、農学部との連携が図れた。	実習や業務の主体を担っている特任教員は5年契約であり、数年以内に契約が終了する。今後、この傾向が継続すると学生教育や研究の推進だけでなく農場運営に大きな支障を及ぼすため、継続して教員の確保に努める必要がある。	教員間の協力体制をさらに円滑にする。	2015年度に任期満了となる特任教員がいるため、後任の担当者を任用する。	農場は管理すべき敷地面積及び、圃場、温室の面積が広く、かつ里山管理や園芸作物の施設周年栽培、有機栽培、食品加工など業務も複雑で多岐にわたる。これらの業務の主体を担っている特任・客員教員の適切な人事配置を、年度計画書により実施する。
教員組織を検証する仕組みの整備						
b ●教員組織の適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善につなげているか。 【600～800字】	②授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みの整備 農学部の農場担当専任教員の採用に際しては、教員募集要項に予定担当科目・応募資格・提出書類・選考方法を明記し【3-36-4】、科目適合性及び透明性を担保するよう取り組んだ。また、特任教員及び客員教員の任用に際しては、農場の事業目的に沿った活動に従事可能な人材であるかを、農場運営委員会を通じて審査している。	客員教員は1年契約のため、毎年任用計画提出の際に農場の事業目的との適合性を検証している。		社会情勢の変化に対応した事業目的に適合できる教員審査の体制を整備する。		3-36-4 明治大学農学部 農場教員募集要項

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画			根拠資料 Alt + Enterで簡条書きに	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述			
(3) 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか								
a	●<規定に沿った教員人事の実施> 教員の募集・採用・昇格について、基準、手続を明文化し、その適切性・透明性を担保するよう、取り組んでいるか。【400字】	農場所属の特任教員及び客員教員の任用に際しては、「明治大学教員任用規程」及び「農場における教員の任用に関する内規【3-36-2】」に基づき適正に行われている。						
(4) 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか								
教員の教育研究活動等の評価の実施								
a	●教員の教育研究活動の業績を適切に評価し、教育・研究活動の活性化に努めているか。【400字】	①教員の教育研究活動等の評価の実施 農場実習については、毎週月曜日に開催される「農場内業務連絡会議」において実習の計画と実績を検討することにより相互評価を実施している。また、研究実績においては外部研究資金導入の実績及び学会発表等により評価できる。	2013年度は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を始め6課題の外部資金獲得した【3-36-5:15頁】		継続して外部資金の獲得に努める。		3-36-5 明治大学黒川農場農場報告第1号(2012年度2013年度合併号)	
教員の資質向上のための研修・諸活動(FD)の実施状況とその有効性								
b	●教育研究、その他の諸活動(※)に関する教員の資質向上を図るための研修等を恒常的かつ適切に行っているか。 (※)社会貢献、管理業務などを含む『教員』の資質向上のための活動。『授業』の改善を意図した取組みについては、「基準4」(3)教育方法で評価します。【600~800字】	②FDの実施状況と有効性 実習終了後授業改善アンケートを実施し【3-36-6】、実習の改善に反映させている。また実習計画と実習終了後の報告書及び学生の実習感想文をまとめ、農学部各学科長に提出し、実習の改善に努めている。	実習終了後の農場実習感想文及びアンケート記載事項を次年度の実習に生かすように心がけている。	農場においては実務を担う校務職員や嘱託職員の資質向上が重要であり、職員の資質向上や資格取得を目的とした教育プログラムの整備が必要である。	農場実習終了時のアンケートを毎年実施する。	校務職員や嘱託職員の資質向上を目的とした、農業や農機具の適切使用のための教育プログラム作りを行う。	校務職員や嘱託職員の資質向上のための長期教育プログラムを策定し、そのための予算化を行う。そのプログラムに基づき、外部講師の招聘や研修出張等による計画的な人材育成を行う。	3-36-6 2013年度農場実習報告書

第4章 教育内容・方法・成果 1. 教育目標, 学位授与方針, 教育課程の編成・実施方針

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画			根拠資料 Alt+Enterで簡条書きに
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画		
					(当年度・次年度対応) H列にあれば記述	(中長期的対応) H列にあれば記述	
(1) 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか。							
a ◎理念・目的を踏まえ、課程修了にあたって修得しておくべき学習成果、その達成のための諸要件(卒業要件・修了要件)等を明確にした学位授与方針を設定していること。 【約800字】	農場における教育の目標は、単に農業体験をさせるだけではなく、学生に実務作業を通じて動植物の生命現象及び自然の生態構造を意識させ、人類は地球環境における生態の一部であること、農学の目的は人類の知恵と科学技術による動植物の生命機能の活用と合目的な制御であることを認識し、理解させることとする。						
(2) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか。							
a ◎学生に期待する学習成果の達成を可能とするために、教育内容、教育方法などに関する基本的な考え方をまとめた教育課程の編成・実施方針を設定していること。 【約600字】	農学部と協調しながら、農学部の教育課程編成・実施方針(カリキュラムポリシー)及び農場の設置目的・目標にしたがってカリキュラムを編成している。【4(1)-36-1:34, 42, 53, 62頁】また、農業や食糧問題について考えることは、学部の枠を超えて重要な課題であることから、2013年度から体験実習型の学部間共通総合講座を新たに開講した【4(1)-36-2:192頁】。	農学部の学生に対しては、農業生産技術の成り立ちを理解させることに役立っている。農学部以外の学生に対しても、農業や食糧問題を考えるきっかけ作りに役立っている。	農学部の学科により実習内容に差が見られる傾向もあるため、教育の均等性が担保できるよう努力してゆく。学部間共通講座にあたっては、他学部の学生数を増加させる必要がある。	学部間共通総合講座の更なる強化を図り、農学部以外の学生数を増加させる。	農学部との連携を強化し、農場における教育の均等性確保に努力する。新たに開講した学部間共通総合講座の他学部学生を増やす努力を行う。	食品加工実習室や果樹園の整備により農場実習の幅を拡げるとともに、学部間共通総合講座を充実させ、他学部との連携を強化する。さらに、国内外の他大学との連携を図る。	4(1)-36-1 2014年度 農学部便覧 4(1)-36-2 2014年度 学部間共通講座シラバス
b ●学位授与方針と教育課程の編成・実施方針は連関しているか。 【約200字】	「専門的な知識・技術の習得のみならず、全地球的・全生物学的視野に立って巨視的に事象を把握し対処することもできる人材を養成する」という農学部の学位授与方針に基づき、学生の総合的な学習を促し、偏った知識のみに陥らないよう配慮されたカリキュラムの一環として農場関係科目群が配置されており、教育課程の編成・実施方針と連関している【4(1)-36-1】。						
(3) 教育目標, 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針が, 大学構成員(教職員及び学生等)に周知され, 社会に公表されているか							
a ◎公的な刊行物, ホームページ等によって, 教職員・学生ならびに受験生を含む社会一般に対して, 学位授与方針, 教育課程の編成・実施方針を周知・公表していること。 【約150字】	農学部内設置授業科目については農学部の便覧及びシラバス【4(1)-36-1:194~195頁, 4(1)-36-3:8~10頁】に掲載している他, 農場実習ガイドンスを実施することで学生へ周知している。また父母会・高校説明会・進学相談会などの機会に保護者や受験生に対して周知している。さらに, 大学ガイド・学部ガイドにも教育目標・実施方針を掲載しており, 受験生をメインターゲットとしながら社会へも情報を公開している。なお, 農場ホームページ上【4(1)-36-4】で公開し, 学生・教職員を含め広く社会に周知している。		農学部以外の学生に対する公表効果が不十分である。		新たに開講した学部間共通総合講座の他学部学生を増やすための情報公開に努める。		4(1)-36-3 2014年度 農学部シラバス 4(1)-36-4 農場ホームページ「実習教育プログラム」 (http://www.meiji.ac.jp/agri/kurokawa/program/index.html)
(4) 教育目標, 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか							
a ●教育目標, 学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性を検証するにあたり, 責任主体・組織, 権限, 手続を明確にしているか。また, その検証プロセスを適切に機能させ, 改善につなげているか。 【約400字】	農場の教育課程については, 農学部設置されている「カリキュラム委員会」にて毎年検討されている。このカリキュラム委員会と農場長が緊密に連携することで, 農学部と協調した検証体制となっている【4(1)-36-5】。						4(1)-36-5 カリキュラム委員会議事録(2014年2月日開催, 審議事項10「2014年度農場実習概要について」)

第4章 教育内容・方法・成果 2. 教育課程・教育内容

点検・評価項目	現状の説明	評価		発展計画		根拠資料		
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「改善を要する点」に対する発展計画				
◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	C列の点検・評価項目について、必ず記述してください			「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	(当年度・次年度対応) H列にあれば記述	(中長期的対応) H列にあれば記述	Alt+Enterで簡条書きに	
(1) 教育課程の編成・実施方針に基づき授業科目を開設し体系的に編成しているか								
必要な授業科目の開設状況								
a	◎CPIに基づき、必要な授業科目を開設していること。 【600字～800字程度】	農作物の播種、育苗、施肥、除草、病虫害防除などの栽培管理、および収穫、出荷調整などを体験し、農業生産技術の成り立ちを理解することと、里山の機能、自然エネルギー、バイオ燃料などについて、実習・講義を通じて理解を深めることを目標としている【4(2)-36-1, 380頁】。 農学部設置されている「農場実習」は基本的導入教育と位置づけられ、「実地を重視し、実地を通じて理解を深め、研究をすすめていく」という農学の基本的性格を、早い時期に、しかも具体的に展開・経験できるよう1年次に配当されている。「農場実習」は、付属の黒川農場における学科ごとに異なる期間に実施する講義・実習から構成されており、1単位が認定されている。里山管理の重要性を教育する必要があり、里山管理を教育できる客員教員を採用した【4(2)-36-2:34, 42, 53, 62頁】	「農場実習」の2013年度の履修者数は、農学科153名、農芸化学科155名、生命科学科137名、食料環境政策学科125名である。1年生の大部分が履修しており、学生から好評を博している【4(2)-36-3】。また、里山管理の重要性を実習を通じて理解できるようになった。	各学科の担当者が工夫して実習に取り組んでいるが、1日あたり農学科77名、農芸化学科52名、生命科学科69名、食料環境政策学科32名と学科により格差があるため、指導内容を工夫する必要がある。	教職員が協力し、より充実した実習を行うよう努めるとともに、里山管理が担当できる教員の確保に努める。	担当教員や職員の数を見直すことにより、スチューデントレシオ差をなくすることにより、学科間の不平等が生じないようにする。また、特徴のある実習教育が行われるよう各学科の実習内容を工夫してゆく。	露地及び施設圃場により野菜栽培を中心にしながら、里山管理、果樹栽培、食品加工など幅広く特徴のある実習教育が可能な環境と体制を整備し、学生指導の高度化を図る。また、社会人教育についても、里山管理や食品加工を含めた幅広いカリキュラムを編成する。	4(2)-36-1 2014年度教育・研究に関する年度計画書 4(2)-36-2 2014年度農学部便覧 4(2)-36-3 2013年度農場実習履修成績データ
b	◎幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていること 【200字～400字程度】	農作物の播種、育苗、施肥、除草、病虫害防除などの栽培管理、および収穫、出荷調整などを体験し、農業生産技術の成り立ちを理解することと、里山の機能、自然エネルギー、バイオ燃料などについて、実習・講義を通じて理解を深めることを目標としおり、幅広く深い教養を涵養する教育課程が編成されている。						
順次性のある授業科目の体系的配置（履修体系図やコース系統図の明示、科目相関図、4年間の履修モデル、適切な科目区分など）								
c	●教育課程の編成実施方針に基づいた教育課程や教育内容の適切性を明確に示しているか。(学生の順次的・体系的な履修への配慮) 【約400字】	農場実習は、導入教育と位置づけられていることから、農学部1年生対象の実習となっている。学部間共通農場実習入門は、農学部以外の学生を主に対象として開講していることから、学年に制限を持たない。	教員と職員の協力のもとに農場実習が円滑に実施できた。また実習計画と実習終了後の報告書を農学部の各学科長に提出するなど、農学部との連携が図れた。		今後も引き続き、農学部との連携に努める。			
教育課程の適切性の検証プロセスの明確化とその有効性								
d	●教育課程の適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善につなげているか	実習終了後、授業改善アンケートを実施し、さらに学生に感想文を提出させ、実習の改善に反映させている。また実習計画と実習終了後の報告書及び学生の実習感想文をまとめ、農学部の各学科長に提出し、実習の改善に努めた【4(2)-36-4】。	教員と職員の協力のもとに農場実習が円滑に実施できた。また実習計画と実習終了後の報告書を農学部の各学科長に提出するなど、農学部との連携が図れた。		今後も引き続き、農学部との連携し実習の改善に努める。			4(2)-36-4 2013年度農場実習報告書
(2) 教育課程の編成・実施方針に基づき各課程に相応しい教育を提供しているか								
教育目標や教育課程の編成・実施方針に沿った教育内容（何を教えているのか）								
a	◎何を教えているのか。どのように教育目標の実現を図っているのか。 【400字程度】	農業生産技術の成り立ちを理解させるために、農業体験型の実習を行っている。	農業体験の無い学生がほとんどであるため、体験型の実習は好評である。		学生がさらに興味を抱く実習内容を検討していく。			
特色ある教育プログラムの内容とその効果(当該学部等固有のプログラムやGP採択事業など)								
b	●特色、長所となるものを簡潔に記述してください。 【200字～400字程度】	農業体験は農場でしか体験できない教育内容である。農学部の学科別に特徴のあるカリキュラム編成を行い、指導に当たっては、学生20人に1人の教員・職員が配備できるように配慮した。	教員と職員で協力し、学生20人に1人の教職員が配備できた。	学科により、教職員1人あたりの学生数に差がある。	実習効果の向上、安全面からも、教職員の確保に努める。	教職員の配分検討による、学科間のスチューデントレシオ改善。	農場実習を指導する教職員の長期的視野にたった安定確保対策。	

第4章 教育内容・方法・成果 3. 教育方法

点検・評価項目	現状の説明	評価		発展計画		根拠資料	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」 に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述		
◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。							
(1) 教育方法及び学習方法は適切か							
教育目標や教育課程の編成・実施方針と授業形態（講義科目、演習科目、実験実習科目、校外学習科目等）との整合性							
a	◎当該付属機関の教育目標を達成するために必要となる授業の形態を明らかにしていること 【約800字】	農場の教育目標に基づくカリキュラムとして、農作物の栽培技術体系と野菜類の作型に関する解説を行い、実際に圃場で、土作り、施肥、畝立て、除草等の圃場管理、播種、定植等の栽培管理および収穫、出荷調整等の作物栽培に関する技術を連続して体験できるようなカリキュラム編成としている【4(3)-36-1:194~195頁】。					4(3)-36-1 2014年度農学部シラバス
b	●教育課程の編成・実施方針に基づき、各授業科目において適切な教育方法を取っているか。 【約400字】	2013年度の農学部「農場実習」では、学科ごとに実習内容・実習実施期間を分けて授業を展開した【4(3)-36-1:194~195頁】。農学部の教育研究現場で生産的要素を有している場所として黒川農場で実習と講義を行っている。農学を学ぶための基礎的諸分野の内容のほか、実習内容に直接役立つ項目等を含めて分かりやすく具体的に講義している。実習は、野菜などの作物の植え付け・栽培・収穫など一連の農作業を教職員と共に行い、農業の実体を見聞、体得するとともに、農学と農業の一端を実学として学んでいる。実習実施期間は学科によって異なり、農学科は前期実習グループ（4月～7月）と後期実習グループ（9月～12月）に分けて行った。農芸化学科は、3グループに分けて前期（4月～7月）と夏期集中型（8月上旬）を組み合わせで行った。生命科学科は夏期集中型（8月下旬）で行った。食料環境政策学科は、4グループに分けて通年型（前期：4月～7月、後期：9月～12月）で行った。	播種から収穫までの一貫した教育実習を体験できる「農場実習」は選択科目にも関わらず2013年度の履修者数は、農学科153名、農芸化学科155名、生命科学科137名、食料環境政策学科125名であった。1年生の90%以上が履修しており、学生から好評を得ている。さらに、2013年度からは学部間共通総合講座も開始し、18名の受講者があった。	里山管理や食品加工を含めた、より広範な内容の実習教育を実施する必要がある。また、学科により1日あたりの受講者数に差があるので、これに対応した教員数を配置するよう改善を図る。	農学部以外の学生が参加できる学部間共通総合講座の拡充を図る。	学部間共通総合講座に他学部からの学生が多く参加できるよう情報の発信に努める。	栽培から加工まで一貫した教育実習の強化と、周辺の環境を生かした里山文化の教育実習等、実習教育の内容の多様化と強化を行う。また、学部間共通総合講座の充実・強化を図るとともに、他大学との連携も検討する。
学生の主体的参加を促す授業方法（学習支援、TAの採用、授業方法の工夫等）							
e	●学生の主体的な学びを促す教育（授業及び授業時間外の学習）を行っているか。 【なし～800字】	教員・職員・TAが一体化して、学生指導を行えるよう計画している。実施に当たっては、作業の持つ意味を考えさせ、作業をグループ化するなどにより学生が主体的に作業を行うとともに、教員や職員の目が行き届くよう配慮している。	前期で終了する学生については、秋に収穫実施日を設定するなど、実習期間以外にも体験できる場を設定した。		教員の負担にならない範囲で、実習期間以外にも体験できる場を設定する。		

点検・評価項目	現状の説明	評価		発展計画		根拠資料	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」 に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述		
<p>◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。</p> <p>C列の点検・評価項目について、必ず記述してください</p>							
(2) シラバスに基づいて授業が展開されているか							
a	◎授業の目的、到達目標、授業内容・方法、1年間の授業計画、成績評価方法・基準等を明らかにしたシラバスを、統一した書式を用いて作成し、かつ、学生があらかじめこれを知ることができる状態にしていること【約300字】	2012年度は開所前に作成したため実態に合わない点もあったが、2013年度は実現可能なシラバスの作成に努めた。		農作業は天候に影響されるためシラバス通り実施できないことが多い。		できるだけ実態に合ったシラバスを作成する。	
b	●シラバスと授業方法・内容は整合しているか(整合性、シラバスの到達目標の達成度の調査、学習実態の把握)。 【約400字】	「農場実習」は、農学部シラバスに基づいて授業が展開されているが、天候や圃場の状態により変更を加えながら実施している。	天候に影響されシラバス通り実施できないことがあるが、代替作業や講義により学生が修得すべき内容は学ばせている。		代替農作業や講義内容の充実に努める。		
c	●単位制の趣旨に照らし、学生の学修が行われるシラバスとなるよう、また、シラバスに基づいた授業を展開するため、明確な責任体制のもと、恒常的にかつ適切に検証を行い、改善につなげているか。	毎週開催される農場内業務連絡会議で検証を行っている。	各学科の実習内容を、農場の教職員全員が把握できている。		農場全体で、継続して検証していく。		
(3) 成績評価と単位認定は適切に行われているか							
a	◎授業科目の内容、形態等を考慮し、単位制度の趣旨に沿って単位を設定していること。(成績基準の明示、授業外に必要な学習内容の明示、ミニマム基準の設定等、(研究科)修士・博士学位請求論文の審査体制) 【約400字】	成績評価方法は、シラバスに明記した。平常点70%、レポート30%。ただし、4分の3以上の出席がなければ評価対象としない。	実習は、体験して初めて教育効果が上がることから、平常点を重視した成績評価としている。		実習への取り組み態度との関係からも成績評価を検討する。		
(4) 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善(授業に関わるFD活動)に結びつけているか							
a	◎教育内容・方法等の改善を図ることを目的とした、組織的な研修・研究の機会を設けていること。 【約800字】	農学部設置されている「カリキュラム委員会」で、黒川農場の開所により、2012年度より学科の特性に対応した、通年型の実習教育を展開するカリキュラムに改正した【4(3)-36-2】。					4(3)-36-2 カリキュラム委員会議事録(2011年4月21日開催、審議事項1「2012年度カリキュラム改正について」)
b	●授業アンケートを活用して教育課程や教育内容・方法を改善しているか。 【約400字】	実習終了後、授業改善アンケートを実施し、さらに学生の感想文を提出させ、実習の改善に反映させている。また実習計画と実習終了後の報告書及び学生の実習感想文をまとめ、農学部の各学科長に提出し、実習内容の改善に努めた【4(3)-36-3】。	実習終了時に学生に実習の感想を書かせており、それに基づく実習の改善を行っている。		実習終了時の感想文やアンケート提出を継続して実施する。		4(3)-36-3 2013年度農場実習報告書
c	●教育内容・方法等の改善を図るための責任主体・組織、権限、手続プロセスを適切に機能させ、改善につなげているか 【約400字】	農場実習学科別報告書を作成し、農学部の各学科長に提出した【4(3)-36-3】。各学科から、特にコメントが有れば農場に意見を頂き、実習内容の充実に努めた。	実習終了時に学生に実習の感想を書かせており、それに基づく実習の改善を行っている。		実習終了時の感想文やアンケート提出を継続して実施する。		

第4章 教育内容・方法・成果 4. 成果

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画			根拠資料 Alt + Enterで簡条書きに
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述		
(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか							
a	●課程修了時における学生の学習成果を測定するための評価指標を開発し、適切に成果を測るよう努めているか。 【なし～400字程度】	露地野菜栽培を中心に、先端的施設栽培施設及び里山管理など幅広い実習教育を実施しており、栽培を体験できる農場実習は学生に好評である。実習終了後に感想文を提出させ、次年度の実習内容の改善に努めている。	農場実習終了後に懇談会を実施している。一貫した作物栽培を体験できる農場実習は学生に好評であり、選択科目であるが農学部では受講率が90%以上である。	栽培及び里山管理に加え食品加工を含む広範な内容の農場実習となるよう、内容を強化する。また、学部間共通総合講座においても内容の多様化に取り組む。	教職員と学生の交流の場を深める努力をする。	里山管理の実習をはじめ、実習内容の多様化に取り組み、できるだけ学生と交流ができるよう努力する。	里山管理や食品加工を含めた広範な内容の農場実習となるよう、内容を強化する。
c	●学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)を実施しているか 【約400字～600字】	農学部の学生に対するアンケートや感想文においては、一貫した作物生育を体験できる農場実習は好評である。また、社会人講座においても、講義と実習指導がセットされた内容が極めて好評であり、受講希望者が多い。					

第6章 学生支援

点検・評価項目	現状の説明	評価		発展計画		根拠資料
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」 に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述	
◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。						
(1) 学生が学修に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう学生支援に関する方針を明確に定めているか						
a	●修学支援、進路支援に関する方針を、理念・目的、入学者の傾向等の特性を踏まえながら定めているか。また、その方針を教職員で共有しているか。 【約200字】	年度計画を立て、農場運営委員会分科会において検討している。さらに、定期的開催される農場内業務連絡会議において、状況を報告・検討することにより、改善に取り組む。農場への学生アクセスについては、2013年度から、最寄りの黒川駅(小田急多摩線)から農場までスクールバスの運行を開始した。	スクールバスの導入により学生の通学に伴う負担が軽減し、学生には好評である。		スクールバスを継続的に運行するとともに、利便性の高いダイヤとなるよう検証する。	
b	●方針に沿って、修学支援のための仕組みや組織体制を整備し、適切に運用しているか。 ○留年者、休退学者の状況把握と対応 ○障がいのある学生に対する対応 ○外国人留学生に対する対応 ○学生支援の適切性の確認 【約400字～800字程度】	2013年度の学部間共通総合講座「農場実習」の履修者に、聴覚障害のある法学部学生がおり、この学生のサポートは手話通訳者の派遣を外部に委託し対応した。 2013年11月に、農学部と共同してタイ国カセサート大学から教員2人、学生3人を招聘し、農場からは国際交流担当の特任教員を中心に実習等を通じて交流を円滑に実施した。留学生や聴覚障害者への配慮ある実習が実施できた。		留学生や障害者に対する個別対応はできたが、組織的な対応はできていない。		留学生や障害者に対する個別対応はできたが、組織的な対応を確立させる。
(2) 学生への修学支援は適切に行われているか						
a	●方針に沿って、修学支援のための仕組みや組織体制を整備し、適切に運用しているか。 ○留年者、休退学者の状況把握と対応 ○障がいのある学生に対する対応 ○外国人留学生に対する対応 ○学生支援(補習・補充教育に関する支援など)の適切性の確認 【約400字～800字程度】	黒川農場は最寄り駅から徒歩で約20分要するため、2013年度から黒川駅と農場の間にスクールバスを運行することで、来場者のアクセス改善を図っている。また、農場内の本館は館内の段差を解消し、要所に点字ブロックを設置したほか、エレベーターや多目的トイレを設置し、障がいのある方の利用へ配慮している。また、農場実習の実施に際しては学生への補助・支援のためにTAを配置し、実習内容の理解を深めるとともに安全面にも配慮している。				

第7章 教育研究等環境

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画			根拠資料 Alt+Enterで簡条書きに
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画		
					(当年度・次年度対応) H列にあれば記述	(中長期的対応) H列にあれば記述	
7-1 校地・校舎及び施設・設備							
(1) 教育研究等環境の整備に関する方針を明確に定めているか							
a ● 学生の学修、教員の教育研究の環境整備に関わる方針を、当該大学の理念、目的を踏まえて、定めているか。	黒川農場は、既存農場（富士吉田、菅田）の機能統合・拡充により、学生が継続した栽培教育を受けることができるとともに、環境との共生をコンセプトに、高度な先端技術を駆使した生産・効率性の高い栽培システムと持続可能な資源循環型のシステムを併せ持つ大学農場として2012年4月に開所した【7-36-1】。本農場は、教育・研究圃場面積として露地圃場約1.4ha、大型温室3棟、中型温室1棟、小型温室3棟が設置され、2013年からは樹園地に実習用の果樹が植栽されている。黒川農場は同じ小田急線沿線にある生田キャンパスに設置されている農学部及び大学院農学研究科の教育研究を推進するとともに、社会人対象の農業講座の開催や、農業相談等の地域交流を事業目的として運営しており、農場長を責任者とする「農場運営委員会」を設置し、農場に関する事項を審議している【7-36-2】。						7-36-1 農場パンフレット 7-36-2 明治大学農場規程
(2) 十分な校地・校舎および施設・設備を整備しているか							
a ● 方針に沿って、施設・設備、機器・備品を整備し、管理体制や衛生・安全を確保する体制を備えているか。	<p>教育・研究に関する年度計画書（7-36-3：379、382頁）に基づき、圃場整備計画、備品整備計画の年次計画を立案し、予算要求や環境整備を行っている。その他に、外部資金獲得による研究機器・装置の充実も図っている。</p> <p>農場では事務機能及び実験室・研究室や教室などの教育研究機能を併せ本館を中心とした施設・設備を利用して学生及び生涯教育講座受講生等が学んでいる。そのほかの教育・研究施設としては圃場、栽培温室、展示温室、豚舎、ベレット生産場、自然生態園等の施設を擁している。大型温室3棟、中型温室1棟、小型温室3棟では、最先端技術の養液栽培システムを用いた研究を実施している。また、農学部と協力し、周辺約6.4haの緑地における里山管理手法の教育を行っている。</p> <p>施設・設備等の維持・管理については、設備・清掃及び警備の各業務を外部業者に委託する総合管理方式を採用しており、委託業者により配置された総合管理責任者のもと、法規を遵守した管理を実施している。また施設に不具合が生じた場合は、総合管理責任者からの報告書をもとに関係教職員及び部署と連携し適切な管理に努めている。なお警備員の巡回に加え、監視カメラや火災感知器を主要な箇所へ設置し、本館内の事務室に設置された監視カメラのモニターや警報機で監視することや、夜間機械警備を導入する等により、不測の事態や不審者等に対応している。</p> <p>施設の安全・衛生の確保については、館内の段差の解消や点字ブロック及び多目的トイレの設置等によるユニバーサルデザインに対応した施設となっており、不特定多数の利用に配慮している。また、法令対応としてビル管理法に基づく害虫点検・駆除及び空気環境測定及び消防法に基づく消防設備点検を定期的実施している。</p>	<p>アグリサイエンス研究室、フィールド先端農学研究室の2研究室を設置するための整備が行われ、順調な学生指導が行われた。</p> <p>黒川駅と黒川農場を結ぶスクールバスの運行が実施された。</p> <p>2013年度は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、研究機器や装置が充実した。</p>	<p>黒川農場は黒川駅から離れているため、夜間の帰宅学生の通学対策が必要である。里山管理の対応が十分ではない。</p>	<p>外部研究資金等の導入による機器整備の促進による教育・研究環境の充実。</p>	<p>農場所属特任教員とアグリサイエンス研究室及びフィールド先端農学研究室の共同研究の実施強化。</p>	<p>黒川農場を核として、学内及び外部機関と連携した共同研究を推進し、大型の外部資金を継続して獲得する。</p>	7-36-3 2014年度教育・研究に関する年度計画書

第8章 社会連携・社会貢献

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画		根拠資料 Alt+Enterで簡条書きに	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述		
(1) 社会との連携・協力に関する方針を定めているか							
a ●社会連携・社会貢献に関する方針を定めているか。 ●教職員・学生が方針を共有しているか。	(1) 社会連携・社会貢献の目的 黒川農場は、明治大学の新たなサテライトキャンパスとして社会連携及び社会貢献に努める。そのため、黒川農場の基本理念として「地域共生」が定められている【8-36-1：378, 382頁】。これに基づき2008年度からリバティアカデミーの一環として生田キャンパスで開講していた市民農園型農業講座「アグリサイエンス講座」を発展させ、当面の到達点として開所後4年後を目途に、4講座200人の規模の「アグリサイエンスアカデミー」を開講している【8-36-2：7頁】。 (2) 産・学・官との連携の方針 川崎市とは、2007年に締結した「明治大学と川崎市との連携・協力に関する基本協定書」に基づき、2009年に「明治大学と川崎市との黒川地域連携協議会設置に関する覚書」を締結し、同年に明治大学・川崎市連携協議会を発足させた。さらに、神奈川県とは都市農業振興に関する連携協定を締結している。これらの協定に基づき自治体や企業と先端的栽培技術や地域バイオマスの活用について連携していくことを基本方針としている。 (3) 地域社会・国際社会への協力方針 農場は川崎市黒川地区における社会貢献・地域連携の中核をなすものであり、近隣自治体との連携を深める。具体的には、里山を使った市民講座や食品加工室の利用などが挙げられる。神奈川県及び川崎市と連携協定を締結し、これに基づく連携・協力を進めている。その一環として2013年2月には川崎市と「明治大学と川崎市との生ごみリサイクルに係わる連携事業に関する覚書」を締結した【8-36-3】。 また、2015年度「教育・研究年度計画書」の策定とその推進について(学長方針)に謳われているとおり、国際化推進が一層求められている。農場では開発途上国の留学生に対する農業教育・研究の場として活用するとともに、JICA(国際協力機構)等の機関と提携し、研究者や学生の交流を行う。	川崎市と生ごみの農業利用促進について覚書を交換し、市民と協力した事業を実施している。市民農園型農業講座「アグリサイエンス講座」は2013年度から2講座を開設したが応募が多く、好評である。国際交流については、農学部と協力してタイのカセサート大学、中国山東省の中日合作企業との交流を行った。さらに、2014年3月にはフィリピン共和国土壌・水質管理局の専門家2名を招集し、農場主催の国際ワークショップを開催した【8-36-2：22頁】。	国際交流を推進するためには、人員配置や留学生の宿泊施設等の受け入れ環境を、よりいっそう整備することが必要である。市民農園型農業講座については地元の期待も高く、要望も多いので、内容の拡充を検討するとともに人員配置等を考慮する必要がある。	農場と川崎市との交流及び国際交流を発展・強化する。	川崎市との連携事業を推進する。また、市民講座の拡充を図る。国際交流は、農学部と連携し、タイのカセサート大学、中国山東省の山東朝日緑源農業高新技术有限公司等との交流を継続して推進する。さらに、フィリピン国等東南アジア諸国との連携を強化する。	川崎市とともに神奈川県との連携事業を推進する。市民講座は里山管理や食品加工など幅広い講座を開催する。また、国際交流は、農学部と連携し、タイのカセサート大学、中国の中日合作企業等との交流を推進するとともに、台湾及びフィリピンの大学との交流を検討する。また、農学部と共同した短期留学生への単位認定制度の導入を検討する。	8-36-1 2014年度 教育・研究に関する年度計画書 8-36-2 明治大学黒川農場農場報告第1号(2012年度2013年度合併号) 8-36-3 明治大学と川崎市との生ごみリサイクルに係る連携事業に関する覚書
(2) 教育研究の成果を適切に社会に還元しているか							
a ○農場の社会サービス活動	○農場の社会サービス活動 学長方針【8-36-1：25頁】において、「黒川農場を活用した地域連携を展開し、『地(知)の交流の拠点』としての役割を目的とした新たな施設等の設置を検討する」指針が示され、これを実現すべく神奈川県及び川崎市と連携協定を締結している。その一環として2013年2月には「明治大学と川崎市との生ごみリサイクルに係わる連携事業に関する覚書」を締結した【8-36-3】。また2014年2月には「明治大学・川崎市黒川地域連携協議会」の下に3つの専門部会を設置し、各部会の座長には農場教員が就任し、農業振興やグリーンツーリズムの推進に関する協働を進めている。【8-36-4】。さらに、川崎市産学共同研究開発プロジェクト「スモールスタート可能なICT利活用遠隔農業モデル開発」では「養液土耕栽培の自動制御システム」を開発し商品化した【8-36-5】。さらに神奈川県と「都市農業の振興における神奈川県と大学との連携に関する協定書」を締結している。 2013年11月に開催した「収穫祭」には989人が来場し、来場者へ教育研究の内容を紹介した【8-36-2：18～20頁】。農場の一部施設は適宜施設見学の依頼に対応しており、2013年度は98件、1,495人の見学があった【8-36-2：35頁】。また、川崎市環境局との連携協定に基づく「家庭生ごみ段ボール堆肥」の栽培試験について、一般向け研究成果発表会を2013年11月に収穫祭に合わせて開催した。また、「アグリサイエンスアカデミー」や成田社会人大学への講師派遣などによる市民学習や、中学校の職場体験見学の受け入れによる環境教育の場の提供も行っている。	④ 農場の社会サービス活動、社会への還元状況 環境・自然・地域との共生をコンセプトとした新農場を、2012年4月に神奈川県川崎市麻生区の黒川地区に開場し、神奈川県及び川崎市とは連携協定を定め、これに基づく連携・協力を進めている。2012年から開催している「収穫祭」には、多くの市民参加があった。また、リバティアカデミーと連携した市民農園型農業講座「アグリサイエンスアカデミー」の充実など市民への学習の場の提供、小中学校の見学の受け入れや環境教育の場の提供を行い、2012年度は142件1,947名、2013年度は98件1,495名を受け入れており、設置主旨でもある地域と大学の連携による多目的な都市型農場となっている。	農場の社会サービス活動の強化に伴う、適切な人員配置が望まれる。	④ 農場の社会サービス活動 川崎市は民間企業が多く存在し、しかもアグリビジネスへの参入気運は極めて高いことから、これらの企業と先端的栽培技術や地域バイオマスの活用について連携していく。また、市民農園型農業講座「アグリサイエンスアカデミー」が好評を博しており、社会的ニーズが高まっている本講座を発展させ、当面の到達点として4年後を目途に、現状の2講座100名規模から4講座200人の規模への拡大を予定し、リバティアカデミーと共同し履修証明制度適格講座につなげる。	農場の社会サービス活動をより強化するためには、専任の専任事務職員の配備が必要である。		8-36-4 平成25年度第1回明治大学・川崎市黒川地域連携協議会次第 8-36-5 株式会社ルートレック・ネットワークスHP「ニュース」 http://www.routrek.co.jp/view.php?pageId=1323&blockId=17341&newsMode=article
(検証システムと改善実績)			黒川農場運営WG(分科会)の活動が十分でない点もあった。		黒川農場運営WG(分科会)の活動を重視し、問題点の解決を図る。		

第9章 管理運営・財務 1. 管理運営

点検・評価項目 ◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。	現状の説明 C列の点検・評価項目について、必ず記述してください	評価		発展計画			根拠資料 Alt+Enterで箇条書きに
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述 (中長期的対応) H列にあれば記述		
(1) 大学の理念・目的の実現に向けて、管理運営方針を明確に定めているか。							
a ●意思決定プロセスや、権限・責任(教学と法人の関係性)、中長期的な大学運営のあり方を明確にした管理運営方針を定めているか。 ●方針を教職員が共有しているか。	農場の管理・運営は「明治大学農場規程」及び「教務事務部事務分掌内規」に基づいて行なっている。明治大学農場規程に農場長は「学長の命を受け農場の業務を統括し、農場を代表する。」と定められている。また同規程に農場の運営に関する重要事項は「農場運営委員会」の審議に基づき決定すること及び農場運営委員会の下に必要な応じて分科会を設置できることが定められている【9-36-1】。						9-36-1 明治大学農場規程
(2) 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか							
a ◎関連法令に基づく管理運営に関する学内諸規程の整備とその適切な運用	農場の管理運営については、明治大学農場規程に定める「農場運営委員会」の決議に基づき実施される。この農場運営委員会の下に7分科会を設置し、この分科会を中心として、日常の管理運営を行っている。事務組織においては「教務事務部事務分掌内規」に基づいて教務事務部農学部事務室が関係部署協力のもと日常の管理運営を行っている【9-36-2：3頁】。		農場規程は十分に浸透していると言えず、業務改善に結びついていない部分もあった。		農場内連絡会議等により「明治大学農場規程」及び「教務事務部事務分掌内規」を徹底させ、業務改善を図る。		9-36-2 明治大学黒川農場農場報告第1号(2012年度2013年度合併号)
(3) 付属機関等の業務を支援する事務組織が設置され、十分に機能しているか							
a ●事務組織の構成と人員配置の適切性 ●検証プロセスを適切に機能させ、改善につながっているか。	農場に関する事務組織は、教務事務部農学部事務室が担当している。黒川農場には、2014年4月時点で事務室所属の専任校務職員5名、特別嘱託職員2名、短期嘱託職員5名が常駐しており、日常の業務に従事するとともに、毎朝の職員同士の打合せで業務上の問題点の抽出、改善策の検討を共有している。このうち短期嘱託職員1名は農場の事務処理等の業務を兼務し、生田キャンパスの農学部事務室所属の専任職員及び学内の関係部署と連携し、農場の適切な運用管理に努めている。また、設備管理業務・警備業務・清掃業務等の施設の管理運営については、外部の管理会社と業務委託契約している。		生田キャンパスと黒川農場が隣接していないため、必ずしも意思疎通が十分とは言えない。農場の国際化推進及び外部資金の獲得等により事務量が增大するため、現状の事務体制では農場の特色ある事業推進が困難である		農場の事業推進のために、専任事務職員の配置を要望する。	農場の業務の円滑化のために、教育・研究年度計画書に基づき、黒川農場に常駐する専任事務職員を配置する。	

第10章 内部質保証

点検・評価項目	現状の説明	評価		発展計画			根拠資料	
		効果が上がっている点 F列の現状から記述	改善を要する点 F列の現状から記述	「効果が上がっている点」に対する発展計画 G列における伸張項目	「改善を要する点」に対する発展計画 (当年度・次年度対応) H列にあれば記述	(中長期的対応) H列にあれば記述		
<p>◎…法令等の充足を評価する項目です。 ●…学部等が掲げる方針や目標の達成状況を評価する項目です。</p>								
<p>(1) 大学の諸活動について点検・評価を行い、結果を公表することで社会に対する説明責任を果たしているか</p>								
a	◎自己点検・評価を定期的実施し、公表していること 【約400字】	農場における内部質保証のため、中・長期計画及び年度計画の策定において、農場運営委員会等で十分な議論を重ねている【10-36-1】。また、その計画の実施についても、農場運営委員会分科会等で必要な検討を進めながら行われている。 実施に関する検証・評価作業は農場運営委員会内WGである総務WGが担当し、点検・評価後に、検討内容を次年度の計画に生かす方針である。こうした農場におけるPDCAサイクルによる改善の実施を積極的に進めて行き、内部質保証をより確実なものとして行く。	自己点検・評価と年次計画策定を農場運営委員会にて審議することにより、評価結果を年度計画に反映していることを農場所属外の委員にも共有させられている。		自己点検・評価報告書の検証内容を中長期的計画に反映させ、短期と中長期計画を連動させるような取り組みをさらに深化させる。		10-36-1 農場運営委員会(2013-2)記録, 2013年6月17日開催, 議題1「2014年度教育・研究に関する年度計画書について」	
<p>(2) 内部質保証に関するシステムを整備しているか</p>								
a	●内部質保証の方針と手続を明確にしていること。 ●内部質保証をつかさどる諸組織(評価結果を改善)を整備していること ●自己点検・評価の結果が改革・改善につながっていること ●学外者の意見を取り入れていること ●文部科学省や認証評価機関からの指摘事項に対応していること 【800字～1000字程度】	中・長期的課題や計画は、年数回開催される「農場運営委員会」で審議しており、この審議結果に基づき、日常的な短期の諸問題や計画について、毎週月曜日に定例で開催される「農場業務連絡会議」で検討する体制を整えている。	農場の施設及び人員配置はほぼ当初計画通りにできた。 内部保証に関するシステムとして「農場内業務連絡会議」を位置づけた。	「農場運営委員会」が定期的開催できず、十分な機能を果たせなかった。	「農場内業務連絡会議」における内部質保証機能をさらに強化していく。	黒川農場内に「黒川農場自己点検・評価委員会」を設け、結果を「農場運営委員会」において報告内容を検討する。	「黒川農場自己点検・評価委員会」により内部質保証の検討を行う。	
<p>(3) 内部質保証システムを適切に機能させているか</p>								
a	●PDCAサイクルを回すための、Check(点検・評価)およびAction(改善)の具体的内容・工夫 <参考:以下の事項に関して、関連するものについて記述する> ①組織・個人レベルでの自己点検・評価活動の充実②教育研究活動のデータベース化の推進 ②教育研究活動のデータベース化の推進 ③学外者の意見の反映 など	自己点検・評価報告書の作成に際しては、農場運営委員会の議を経ている【10-36-2】。農場運営委員会メンバーが、定期的開催される農場業務連絡会議で評価結果を報告することにより、日常活動の改善に活かす内部質保証システムを適切に機能させている。		内部質保証のための自己点検・評価結果が農場の全教職員に浸透しておらず、改善策が必ずしも徹底していない。		自己点検・評価に基づく問題点を改善するために、農場の将来構想を検討する分科会等を設置する。	将来構想を検討する分科会等での検証結果に基づく年次計画を策定し、PDCAサイクルによる改善を実質化する。	10-36-2 農場運営委員会(2013-1)記録, 2013年6月3日開催, 議題2「2013年度自己点検・評価の実施(2012年度報告書の作成)について」